Hayama Mariko

「肉体へ回帰せよ」(部分)　2012　ワードローブ、家具、家電製品、日用品、ラップ、内装材

LIXIL ART NEWS _ No.354

羽山まり子展

―マイホーム―

2013年10月3日(木)～10月28日(月)　水曜日休館

協力：　株式会社　河合建築

LIXIL ギャラリー

LIXIL GALLERY
東京都中央区京橋3-6-18 東京建物京橋ビル　LIXIL：GINZA 2F
phone 03-5250-6530
制作発行：株式会社 LIXIL　デザイン：SOUVENIR DESIGN INC.
http://www1.lixil.co.jp/gallery/

1

3

4

5

2

Hayama Mariko

1. family addiction　2010　椅子、ベルト、ネクタイ、リボン　撮影：加藤 健
2. eating disorder　2010　皿、砂糖、テーブル　撮影：加藤 健
3. 母をふむ　2012　家具、家電製品、日用品、ラップ、内装材
4. 柏ビルのゲル時間　2012　内装材、制作道具、作品素材、ラップ
5. private lifeline　2010年　カップ、絨毯
6. hole without the exit　2009　お菓子のゴミ、テーブル、テーブルクロス、椅子

6

――羽山さんは家族などの身近なテーマで、既成の家財道具をダイナミックに使う表現が印象的です。もともと社会的なモチーフに興味があったそうですね

羽山：最初に学部の卒業制作「kawaguchi33work」(2008)で、地元埼玉県川口市の鋳物工場を取材したのが始まりです。自分の作品の色彩が、鋳物工場の錆色に似ていることに気づいて、そこを原風景と捉えることで制作に結び付けたんです。

私が育ったところは新興住宅地でコミュニティが希薄だった上に、両親の考え方も個人的成果に重きを置いていたので、人や社会との繋がりに満ち足りないものを感じていたんだと思います。学部入学当初は自分の内面を突き詰めて行けば、底が抜けて社会に繋がれるのではないかと考えていたのですが、行き詰まりまして、それで逆の発想に変えて、先に社会問題をテーマにすることで、そこからまた個人に戻って来られないだろうかと考えました。

大学院の時に参加していた「ワタラセアートプロジェクト」では、足尾の歴史、残されたものに着目した作品を制作したりしました。また、この頃から一人暮らしをするようになって、摂食障害や食糧自給率などの社会問題が自分にとって身近な問題であることに気がつきまして、自分が土地や家族と切り離せないものだと気がついたんです。

――「family addiction」(2010)が家族を正面から扱った最初の作品ですか

羽山：「ワタラセアートプロジェクト」で活動している時に、キュレーターの鈴木勝雄さんから声を掛けて頂いて、サイトスペシフィックでないαMギャラリーで展示をすることになりました。鈴木さんと議論を戦わせながらすごく悩み、これまでコミュニティをテーマにしてきたこともあり、最終的に家族という最小単位のコミュニティを扱うことで考えが固まった作品です。地下にあるギャラリーなので、家族の関係という普段見えないものを覗かせることが可能だと思い制作しました。

モチーフは私自身の家族で、私の生まれた1980年代に幸せの象徴とされてきた家庭の雰囲気を感じる家具を集め、4つの椅子を家族4人になぞらえて、家に縛られていることを表現しました。家族には外とは繋がっていない別の世界があり、属性の役割や血族であったり、なにかに縛られているというイメージです。

――「肉体へ回帰せよ」(2012)から、これまではバラバラに構成していた家財道具をラッピングしました

羽山：穴を開けたワードローブと1980年代の家財道具をラッピングしたもので構成した作品です。ワードローブは自分自身の自画像で、情報化社会の中で自我が崩れ去って行くイメージです。時代はどんどん軽薄短小になって、私が育った1980年代のように重厚長大なものが消えて行った、ノスタルジーもあります。

ラッピングは、記憶やイメージを膜で包むような感覚で、大事に保存しながら、概念として固めてしまう。また多層的にラップを巻くことで、記憶やイメージと自分との距離感を表わしました。

1980年代の家庭という設定で、見る人が作品を通して記憶を想起させることで、そこから対話が生まれ、コミュニケーションが取れるようにしたかったんです。実際に会場ではダイレクトな感想を言って頂けて、喜ぶ人も怒り出す人もいました。本気で見てくれているんだなと感じました。

その次の作品「母をふむ」(2012)では、上に積み上げているのが母の育った1960年代の家財道具、下にあるのが私が育った1980年代のもので、母の母(祖母)と私の母という二人の母を通して、母という概念が時代と共に一部は変容しながらも娘に踏襲されていくことを表現しました。「母をなぞる」というタイトルでもあり、母の影響、偉大さ、娘と母の切っても切れない脈々と繋がるものを表わしました。

――家財道具の存在感は大きいですね

羽山：1960年代の家財道具がなかなか見つからなくて、ある方の家に残っていたお母様の家財道具を多く借用しました。1点1点借用リストをつくって、終わった後は返却しました。

そのモチーフの中に花柄のものが結構あるのですが、他の方にも聞いたのですが、花柄プリントが家財の中で唯一明るい幸福感を感じさせるもので、好きだったそうです。当時の家庭の幸せの明るいイメージが、花柄の装飾だったみたいですね。それまで日本家屋特有の薄暗い、陰翳礼賛と言われる中に、近代的な電化製品などが登場して間もなく花柄が流行したようです。

今展は3年ぶりの個展になりますが、1980年代の家財道具を使いながら、そうした時代の幸福を象徴する装飾模様を糸口に普遍的なものを探りたいと思っています。また、重力からも開放されたイメージで空間を構成したいと考えています。

インタビュー：大橋恵美(LIXILギャラリー)
2013年6月17日

羽山まり子

Hayama Mariko

1983年　千葉県生まれ
2010年　女子美術大学大学院修士課程修了

個展
2009年「keep distance」ガレリアnike(東京)
2010年「複合回路vol.4羽山まり子」galleryαM(東京)

主なグループ展
2008年「WATARASE Art Project」(栃木)
2009年「WATARASE Art Project」「show case」(群馬)
2009年「WATARASE Art Project」「渡良瀬社宅アーティストインレジデンス」(栃木)
2009年「WATARASE Art Project」「わたらせ社宅展」(栃木)
2010年「WATARASE Art Project」「Discovery After 400 Years」(栃木)
2012年「川口の新鋭作家展2012」川口市立アートギャラリーアトリア(埼玉)
2012年「海のいどころ」ゲルオルタナ(東京)

受賞
2008年　Artist Critic Program(女子美術大学)
2011年　川口の新鋭作家展2011入賞(川口市立アートギャラリーアトリア)